「羅生門」再読

高木　まさき

序

「羅生門」についての先行研究は相当な数にのぼっているが、その研究史をふりかえってみると、多くの研究が「あの頃の自分の事・別稿」に書かれた「羅生門」執筆の動機に関する記事および「羅生門」執筆前後の芥川の書簡にみられる人生上の煩悶を検討し、それとのかかわりの中で「羅生門」を読み解こうとしてきている。そうした試みの中から、「羅生門」を「暗さ」や「陰鬱さ」においてのみ読むことから「明るい可能性」を秘めた作品として読もうとする試みが生まれたことは、一つの成果だったと言えるだろう。

だが、こうした試みの中には、つねに危険がともなっている。たとえば三好行雄は「羅生門」の論を次のように書き起こす。

エゴイズムを離れた愛は存在しない。だから、人間の孤独も苦悩もついに癒されることは不可能である。しかし、滅びを予感しながら、人間の原風景を見つづけねばならぬというのが、「羅生門」を起稿する直前、吉田弥生との愛の破綻の心的体験から、芥川龍之介の選びとった決意もしくは感傷である。(注1)

これは先述の「あの頃の自分の事・別稿」を手がかりに、書簡から三好が読みとった「羅生門」執筆時の芥川の心境である。だが、この論の終わりの方で三好が、

老婆のさかしまの白髪と、彼女ののぞきこむ〈黒洞々たる夜〉と、この風景こそ、芥川龍之介がかかえこんでいた〈虚無〉の対象化である。(注2)

と述べて、作者芥川にとっての問題――おそらくは当時芥川の頭をもっとも悩ませていた問題――と作品「羅生門」の問題とをぴったりと重ね合わせることになると、そこに、わたしたちは一定の留保をしておかなければならないと思われる。

一、生活と芸術

それには、いくつかの理由が考えられる。まず、三好の論の冒頭にまとめられているような芥川の心境が、「羅生門」の読みの先入見とならなかったという保証は、ここにはない。そしてもしこうしたものが先入見として働けば、作品の読みは、作品の表現から離れた形で、さまざまに行われるかもしれない。近年の認知心理学の研究

は、同一のテクストが異なる先入見によって異なった読みを導くことを確かめている。(注3) 実際、書簡に見られる芥川の心境は清水康次によって、

内実と外面とが一致することであり、そのような形での確固たる自己主張であった(注4)

と読まれ、それは清水なりの「羅生門」の読みを保証していくのである。この場合、一言すれば、作品の読みと書簡の読みとどちらが先行するかは、それほど大きな問題ではない。作品の読みが先行した場合でも、その読みが先入見として、書簡の読みを規定していくとき、書簡は、作品の読みを論証する材料とは必ずしもなりえないからである。

また、そもそも、作家の「生活」における問題と「芸術」における問題とが、なにゆえに重なり合わなければならないのかという疑問もある。むろん、まったく重なることがないということもないだろう。しかしまず第一に、それらがいかに重なりあっているのかを証明することは、そう短絡的に解決しうる問題ではないように思われる。フォルマリストのひとり、トゥイニャーノフは、作者の心理や環境等と作品との間に因果関係を見出だすことの危険を述べて、以下の詩人ポロンスキーのことばを引いている。

厳しい自然が、森や耕地……が赤ん坊の――未来の詩人の感じやすい魂に影響を及ぼした可能性は充分ある。しかし、どのように影響したのか。これは難しい問題だ。だれにもこじつけずには解決できまい。(注5)

これは一般論として言えることである。

しかし、ここでは、従来の多くの研究に習って芥川の書簡の一節を引用してみたい。

私は二十年をあげて軽薄な生活に没頭してゐた事を恥かしく思ひます　さうしてひとり芸術に対してのみならず生活に対しても不真面目な態度をとってゐた自分を大馬鹿だと思ひます　はじめて私には芸術と云ふ事が如何に偉大な如何に厳粛な事業だかわかりました　そして如何にそれが生活と密接に連絡してしかも生活と対立して大きな目標を示してゐるかわかりました　私にどれだけの創作が出来るか私がどれだけ「人間らしく」生きられるかそれは全くわかりません（大正四年四月廿三日付、山本喜誉司宛）

「羅生門」が『帝国文学』に発表されたのは大正四年十一月号、そして芥川の失恋事件はこの年の二月以前であり、従来の研究もこの前後の書簡を盛んに引いていることから、ここにこの一節を引くことは不当ではないだろう。そこでこの一節をまとめてみると、芸術は密接に生活とつながってはいるが、むしろ芸術と生活との間に一線を引いて区別し、芸術には芸術なりの「大きな目標」を設けようとする芥川の意識が現れているように思われる。(注6) とくに自然主義系の作家たちに対する芥川の姿勢をコンテクストとしてこの一節を見ると、その感を強くする。また、これまでの「羅生門」研究が書簡をこれだけ駆使するようになった要因である「自分は半年ばかり前から悪くこだはった恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかった。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取って、この二つの短篇（「羅生門」と「鼻」――高木注）を書いた。」という「あの頃の自分の事・別稿」の記載の伝記的事実としての信憑性

が疑われ出していることを思えば、芥川の心境と「羅生門」とを直接結びつけることは危険である。いずれにしても、芥川は、生活上の苦悩とは別の問題を「羅生門」で追及していたという可能性も考えておく必要があるのではないか。(注7)

そこで、本稿では、伝記的資料を一応きりはなして「羅生門」をいかに読みうるかを再検討することが課題となる。

二、二つの読み

ここでは考察の糸口として、「羅生門」の主題について言及した以下の二つの発言を検討することからはじめたい。

A吉田精一

下人の心理の推移を主題とし、あはせて生きんが為に、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズムをあばいてゐる（『芥川龍之介』河出文庫　昭二九・六　六四頁）

B平岡敏夫

従来はこのくだり（老婆の弁明をさす――高木注）を重視し、人間のエゴイズム＝悪の肯定を見てきた。下人が老婆の論理を自己の論理として着物を剝ぐのをふくめてであるが、いかにも芥川らしい機知をそこに読みとることは可能としても、テーマとするほどの比重をかけて良いものかどうか。（『芥川龍之介　抒情の美学』大修館書店、昭和五七・十一　一三二頁）

Aは、「羅生門」をエゴイズムの問題として捉え、いわゆる定説とされてきたもので、古くは竹内真の「生きんが為めのエゴイズムの無慈悲」を見る見方(注8)や三好行雄の「生きるためにしかたのない悪の中でお互いの悪を許しあった」「倫理の終焉する場所」を見る見方(注9)も、同様の視点に立つ（以上をAグループとする）。Bはエゴイズムという問題を作品の中心には据えないという点において、清水康次の下人に老婆と対照的な「強者性」を認める見方(注10)や関口安義のような「明るい可能性を秘めた作品」として「羅生門」を捉えようとする見方(注11)などと通じる面がある（以上をBグループとする）。

ところで、ABの読みの違い、すなわちエゴイズムを中心の問題とするか否かは、何に起因するのであろうか。この点で、興味深いのは、鳴島甫の「羅生門」の諸研究における読みの整理(注12)である。鳴島は二つの観点を設けてそれらを整理しているが、そのうちの一つの観点は、下人が「老婆の行為又はことばにある程度の共感を示している」と読むか「示さないか、むしろ侮蔑している」と読むかということである。そこで氏が対象とした研究のなかで本稿がこれまでに示した研究と一致するものについて、氏の整理の結果をみると

共感を示しているとするもの　吉田精一説　三好行雄説

共感を示していないとするもの　清水康次説　関口安義説

となる。これは本稿が先に行なったABグループへの分類と一致している。そこで、エゴイズムの問題を「羅生門」の中心の問題とするか否かは、鳴島の示した観点、すなわち下人が老婆の行為又はことばに共感を示していると読むか読まないかということに起因すると考えてよいのではないか。なぜなら、エゴイズムの論理を明確にうち出した老婆の話への共感が前提となってはじめて下人が主人公として背負っていた課題である盗人になるための勇気の獲得が可能だったとすれば、エゴイズムの問題は作品の中心的問題と考えるべきであるし、逆に、そうした勇気の獲得が老婆の話への共感に前提されていなくても可能だったとすれば、エゴイズムの問題は作品の

中心からズレると考えるべきであるからだ。

そこでこれまで示した諸家の研究が、その点をどう読んでいるか、具体的に見てみよう。Bグループの平岡説は「下人はにきびを気にしながら「冷然として」聞いており、老婆の話が終わると「嘲るやうな声」で念を押している」ことに注目して次のように述べている。「老婆の話に新しい衝撃を受けたとか、そこにこれからの生き方にかかわる強い共感を得たとかいったものではなく、たんに引剝の口実として利用したのにすぎないのではないか。[注13]」また清水も同じ点に注目して「下人の「勇気」とは、エゴイズムの合理性の認識というようなものではな[注14]」いと言う。これに対してAグループの三好説では「下人に真に必要だったのは〈許す可らざる悪〉を許すための新しい認識の世界、超越的な倫理をさらに超えるための論理にほかならぬ。下人と老婆の遭遇は認識と認識の出会いなのである。[注15]」とする。これは、老婆の認識が下人の新しい認識となってそれが下人に勇気を生ませたという文脈に移し換えられ、下人の老婆への共感が前提となった解釈だと考えてよいであろう。この三好説には下人の様子に注目した記述は見られないが、同じAグループに属する竹内説は「岩城準太郎の梗概を借用すれば」として、下人は老婆の話を「聞いて、はっと己の生存の問題に思当り、（中略）決然と引剝になって[注16]」とする。竹内において「冷然として」ということばはとりあげられず、下人が老婆の話を「聞いて、はっと」したと捉えられていることは平岡説との対比において重要である。むろん「はっと」などということばを芥川は書いていない。その点、同じAグループの吉田説の梗概には「はっと」ということばはなく、下人は老婆の話を「きいて、彼も亦決然として引剝になって[注17]」とあり、作品の表現に忠実に見える。だがその場合でも、「きいて」の「て」という助詞が、接続機能をもつというよりも、時枝誠記の言うように「原因」を表示しているのだ[注18]とすれば、老婆の話は下人に勇気を生じさせるだけの価値、鳴島の表現にしたがえば「ある程度の共感」を下人に抱かせたことになり、本質的には「はっと」したのと同じことになる。

そこで本稿は、下人が老婆の話に共感したと読むべきか、そう読むべきでないかを検討するため、作品の表現を読みなおしてみなければならない。

三、細部の検討

老婆の話を聞く下人の様子は次のように描かれている。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面皰を気にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇気が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けてゐた勇気である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕らへた時の勇気とは、全然、反対な方向に動かうとする勇気である。

右のなかでは、「冷然として」「面皰を気にしながら」は平岡らによって注目されていることは先述した。また「門の下で……欠けてゐた勇気」「反対な方向に動かうとする勇気」ということばも、このときの下人の勇気の内実を捉えようとする時に、よく注目される表現である。だが、清水らも言うように、この作品は下人における

「勇気」の獲得をめぐって展開されているのだから、(注19) 傍線部の一文もまた見すごされてはならない。

ここで「しかし」に注目してみよう。すると下人は「冷然として」表面的には平静だったけれども、実は「心」のうちには、老婆の話を聞くことによって、勇気が生まれてきていたのだと読める。もしそう読めば、平岡らの指摘にもかかわらず、下人にとって老婆の話は「新しい認識」となって、表情には出ない「共感」なり「衝撃」なりがあったと考えることはそれほどむりではない。したがって、この意味では、Aグループの読みを誤読としてかたづけることはできない。

だが、本稿は、別の細部に注目する。作品には「聞いてゐる中に」とあり「聞いて」とあるわけではない。「ゐる中に」の有無によって、どのような相違が生じるのだろうか。

まず第一に「聞いてゐる中に」には時間の経過が読みとれるが「聞いて」にはそれはない。しかし、ここではまず両者における「原因」の表示の相違を問題としたい。表面上の出来事として見るならば、あるいは時枝のことばに従って、観察的立場において見るならば、両者の間には、そうした点での相違はない。たとえば「雨降り、地固まる」と「雨降れば、地固まる」(注20)とは、出来事としてみればどちらも前件が後件の原因と見なされる。それと同じようにAグループの読みは、老婆の話と下人に勇気の生まれることとが「聞いてゐる中に」によって結ばれる場合と「聞いて」によって結ばれる場合とを、区別なく前件が後件の原因だと見なしていたと考えられる。バルトのことばを借りれば、「物語のなかで」「あとからやって来るもの」を「結果として読みと」(注21)ったということになるだろう。

だがここで、表現そのものに目をむけて、あるいは時枝のことばに従って主体的立場において、「聞いてゐる中に」と「聞いて」を検討してみよう。すると前者における「て」は後者が「原因」を表示するのとはちがって、たんに連用修飾の関係を表示する機能しか持たないことに気づく。前者においては、「原因」を表示する機能はなく、二つの出来事の「継起の仕方」のみが表示されているだけで、この部分には、下人の心に「勇気が生まれて来た」ことの原因を特定する表現はないのである。だとすれば、Aグループの読みは、いわば「継起性と因果性との混同」(注21)によって成り立っていたと言えるだろう。

むろん、こうした混同は、芥川の短篇「酒虫」(大正五年)に

酒虫を吐いて以来、何故、劉の健康が衰へたか。何故、家産が傾いたか——酒虫を吐いたと云ふ事と、劉のその後の零落とを、因果の関係に並べて見る以上、これは、誰にでも起こりやすい疑問である。

とあるように、われわれが、日常、しばしば行なっていることである。さらにトドロフは「論理的なものと時間的なものとが相互に截然と分離して純粋状態で見出だされる場合も、考えられるが、しかしこのときわれわれは通常文学と呼ばれているものの領野からは去らざるをえない」(注22)と言う。このように、「継起性と因果性の混同」が、われわれにとって、また文学にとってつきものであるならば、Aグループの読みにも、この意味では、一応の可能性は認めなければならないだろう。

だが当然のことながら、問題なのは、「聞いてゐる中に」という

表現が、二つの出来事の継起の仕方しか表示していないことを忠実に読みとる読みと、右に述べた「混同」によってそこに因果関係を読みとる読みと、そのどちらが作品の解釈により高い整合性を与えることができるかということである。そして、本稿は前者のように読むことにその有効性を認める。それは、「聞いてゐる中に」という表現が継起の仕方しか表示していないと読むことの方が下人の性格に一貫性を与えることができるからである。

四、下人の性格

宇野浩二は「これだけ見れば、（これは『羅生門』の筋を抜き書きしたのであるが、）実にはっきりした（はっきりし過ぎた）テエマ小説である。」[注23]という。すでに述べたように、この作品は下人における勇気の欠如と獲得の物語と説明でき、そのことは、プロップの昔話の登場人物の機能分析[注24]をも想起させ、その意味では筋のあらわな作品としての一面を、たしかに有している。

しかし、もとより「羅生門」は筋のみあらわな昔話などではない。バルトのことばに従えば、昔話はきわめて「機能的」であり、「羅生門」は、むしろ「指標的」[注25]である。機能的であるということは、因果的単位の連鎖が優位であること、すなわち筋の優位を示す。一方、指標的であることは、意味論的な単位の優位を示す。この単位は登場人物の「性格」や「身元」、「場面」、「雰囲気」[注26]などを表わす。そして実際、近年の「羅生門」の研究は、この指標に多く注目している。[注27]

だが、指標的単位は機能性ももちうる。トドロフは「直接の因果は（プロップにその傾向が見られるように）≪行動≫の間の関連のみに限られてはならない。（中略）これはいわゆる「心理の」物語にまでわれわれをみちびく」[注28]と言う。ここで、「心理」を性格と置きかえて考えてみると、Aグループの読みは、行動の間の関連のみに縛られすぎていて下人の性格にまで十分な注意を払っていなかったと言えるのではないか。

清水や平岡も指摘するところではあるが、下人は合理的な判断のもとに行動するような人間ではなかった。[注29]「鼻」の表現をかりて「明が欠けてゐた」と言ってもよい。

下人には、もちろん、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それ丈で既に許す可らざる悪であった。勿論、下人は、さっき迄、自分が、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れているのである。

これは、下人の不合理性を指摘する際に必ずひかれる部分である。さらに、そうした例として先行研究の指摘したところを示せば、「この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。」（平岡）[注29]「これを見ると、下人は始めて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意思に支配されてゐると云ふ事を意識した。さうしてこの意識は、今までけはしく燃えていた憎悪の心を、何時の間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、唯、或仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。」（清水）[注29]などがあげられ、下人の性格は浮き彫りにされていく。

そして、こうした指摘を概観していく中で気のつくことは、下人の心が、相手の存在の仕方によって動かされているということである。下人が「許す可らざる悪」を感じたのは、老婆が死人の髪の毛を抜く「魔物的な存在」(注30)として下人の目に映っていたからであり、楼上にいる「どうせ唯の者ではない」何者かに対しては「体を出来る丈、平にしながら」「恐る恐る」「覗いて見」、また老婆が「自分の意思に支配され」た存在として意識されると「憎悪の心を、何時の間にか冷まし」「安らかな得意と満足と」に満たされる。さらに死人から抜いた髪の毛は鬘にすると答える「平凡な」老婆に対しては、「失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しょに、心の中へはいって来」る。同一の老婆でありながら、それが下人にいかに映るかによって、彼の心は動かされていくのである。このように下人の性格を読みとってくると、羅生門の下の下人が「盗人になるより外に仕方がない」事に気づきながら、それを「積極的に肯定する丈の、勇気が出ずにゐたの」は「〈許す可らざる悪〉を許すための新しい認識」を欠いていたとか、倫理感や正義感が彼を押しとどめたといったことではなかったと言える。つまり、門の下の下人には、荒廃しきった世の中は「どうにかしようとして」も「どうにもならない」相手として存在していたのであり、世の中のそうした存在の仕方が下人の勇気を奪っていたと言えるのである。(注31)

このように下人の性格を読みとったとき、「聞いてゐる中に」という表現は、老婆の話と下人に勇気の生まれたこととの間の継起の仕方しか表示していないと読まれるべきことの理由が明らかとなる。下人にとって認識の問題はなかった。問題なのは、ただ相手の存在の仕方のみである。長い弁明をする老婆を下人はすでに、抜いた髪の毛を鬘にすると答えるだけの「平凡な」存在として見ていた。どうにかしようとしてどうにもならない世の中を相手にしていた下人の前に、そのとき、どうにかしようとすればどうにかなる平凡な相手が現れたのだ。下人に勇気を生じさせたのは老婆のそうした存在の仕方、すなわち平凡さであり、老婆の話の中のエゴイズムの論理ではない。(注32)したがって「「聞いてゐる中に」という表現によって結ばれる老婆の話と下人の勇気との間に因果関係を認めると、他の表現に見られる下人の性格との間に一貫性が得られなくなる。さらに「聞いてゐる中に」という表現に時間の経過が読みとれることも大切である。「平凡な」存在としての老婆に感じた「失望」と「憎悪」と「侮蔑」が下人に「勇気」を生じさせるのに必要な時間が、このとき過ぎていったのである。「髪の毛が、一本づゝ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行った」ときにも「あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来た」ときにも、下人の心の変化に時間は必要だったのだ。以上のように、「聞いてゐる中に」という表現は継起の仕方しか表示していないと読まれるときに、下人の性格に、より一貫した整合性を与えることになる。

これまでの検討は、おおむねBグループの読みを支持する。すなわち、老婆の話は下人に勇気を生ませた原因ではない、下人は老婆の話に共感などしていない、ということである。しかしながら、本稿の読みとBグループの読みとの相違も浮かび上がってきている。

五、改稿の意味

Bグループの読みは、下人の「力」に注目する。清水はそれを老

婆や洛中の偽りと弱さに対置して内部の力がそのままに行為となった「ありのままの強さ」[注10]と呼ぶ。また平岡が「下人をして「勇気」へと向かわせることにより、その「雰囲気」の世界を、一種清新なものたらしめ」[注33]たと言い、関口が「ここで下人は一切の世間的虚偽を拒否して（中略）革命の叫びをあげ（中略）老婆を蹴倒す」[注11]と言うときも、下人に力を認めている。

しかしながら、下人にこうした力を認めてよいのだろうか。どうにかしようとすればどうにかなる老婆から「着物を剝ぎとった」下人が「また、く間に」「かけ下りた」夜の底は、下人にとってどうにかなる相手なのだろうか。老婆はその存在の仕方を「魔物」から「平凡」なものへと変えていったが、荒廃した世の中は存在の仕方を変えてはいない。その荒廃の「小さな余波」として下人を羅生門へ追いやった世の中の「強大さ」は、下人の前にふたたび立ちはだかって彼から力を奪うのではないか。[注34]

「羅生門」末尾の改稿の問題、すなわち「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつ、あった」という初出稿（大正四年十一月）から「下人の行方は、誰も知らない」という定稿（大正七年七月）への改稿の問題は、従来さまざまに説明されてきている。下人の力に注目するBグループの論者は、初稿により明瞭な下人の力を認めつつ、改稿の問題を以下のように説明する。平岡は「定稿のこの一行によって、羅生門の世界は、外界を拒絶して完全に閉じられ、作品は現実とは別次元の、美の世界として見事に自立せしめられた」[注33]と言い、清水は「自分を支えるもの」への「関心」が「ありのま、」の「「大き」さ」「「強」さ」から「芸術という営為」に「移動」することによって、芥川が「下人の力」を「問うことを中断してしまった」ことが改稿の意味だと言う。[注35]また関口は、初出稿から定稿への「十八字の省筆」は作品に「空所」を生じさせて芥川が「読者に参与を求め」て「その想像力と協調の上に、「羅生門」の世界を完結させようとした」[注36]と言う。

だが、本稿がこれまで検討してきたことを認めてよいならば、改稿の意味は、主人公である下人の性格をより明瞭化するためであったと、簡単に説明できるのではないか。「羅生門」初出稿末尾の「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつ、あった」という硬質な表現は、Bグループの論者がいうような下人の「力」の持続を読み取りうる可能性を確かに秘めている。ただし「読みとりうる」ということは、そうとしか「読みえない」ということではない。下人は「強盗を働きに急ぎつ、あった」とあり、「に」は単に目的を示すにすぎず、またそのことが行いえたかどうかも書かれていないのであるから、この一文に下人の「力」の持続を読みとることはそれほど自明なことではない。むしろ過去のコンテクストの働きかけ、すなわち下人のそれまでの描かれ方を想起するならば、この一文には下人の力の「挫折」を読み取ることの方が一貫性のある整合性の高い解釈と言えよう。

しかし、初出稿末尾の一文の硬質な表現がやはり下人の力の持続を感じさせる事も否定しきれない。そして実は、それを感じ取ったのはBグループの論者ばかりではなく、芥川自身がすでにそう感じていたのではなかったか。芥川は初出稿そのものに内在するそうした不協和音の要素を払拭して完全な協和音の世界を改稿によって得ようとしたのではないだろうか。改稿された「下人の行方は、誰も知らない。」という表現に下人の力の持続を読みとることは困難

である。初出稿においては、いずれ挫折するにしても下人がある目的を持ったことが明示されているが、定稿にそれはない。さらに、下人が力を持続しえたのならば、その痕跡をどこかに残し、誰かそれを知りえたはずだが、定稿は「誰も知らない」と言う。定稿末尾の表現によって下人の力の挫折は明瞭になり、下人の性格もより明確な一貫性を得た。[注37]「羅生門」の世界は各要素がきれいに響き合う協和音の世界となったのである。

そして、その協和音の世界によって、より鮮やかに浮かび上がったのは、相手の存在の仕方に規定されてしまう――「ありのままま」とも「清新」とも「革命」とも結びつくことのない――悲しく滑稽な下人の姿であった。

結

ところで、「羅生門」に前後して書かれた「仙人」と「鼻」の主人公たち――李小二と内供――の生に、下人と似た「悲しさ」「滑稽さ」が見られることは興味深い。苦しい「運命」には「屈従」するが「見すぼらしい」老人を前にすると自分を「優者だと考」える李小二。鼻の短くなることを願いながら、それが実現したときに「つけつけと哂」われて「鼻の短くなったのが、反て恨めしくなった」内供。彼らに確固たる自己を認めるのは難しく、むしろ自己の対する相手の存在の仕方に翻弄される姿が悲しく滑稽である。むろん、そうした主人公の姿が、これらの作品の中心的問題であるか否かは、べつに検討すべきことである。ただ、当時の芥川が芸術を通して見つめていた人間の一面がそこにあったと言うことはできるかもしれない。少なくとも「羅生門」の問題は、そうした悲しく滑稽な人間の姿を描くことだったのではないだろうか。

注(1) 三好行雄『芥川龍之介論』筑摩書房　昭五一・九　五六頁

(2) 三好　前掲書　七一頁

(3) 内田伸子「文章理解と知識の獲得における目標構造の役割」『お茶の水女子大学人文科学紀要　第34巻』昭五六・三　等を参照のこと。

(4) 清水康次「「羅生門」試論」『女子大文学』大阪女子大学　昭五五・三　一九頁

(5) ユーリー・トゥイニャーノフ「文学の進化」一九二九　小平武訳『ロシア・フォルマリズム文学論集2』水野忠夫編　せりか書房　昭五七年・十一　一二二頁

(6) 竹盛天雄（「羅生門」　その成立をめぐる試論」菊池弘他編『芥川龍之介研究』明治書院　昭五六・三　一八頁）は、この一節をひいて、芥川において「今や「芸術」がわが道として選ばれようとしているのだ。」とする。

(7) 海老井英次「「羅生門」――その成立の時期」雑誌『國文学』學燈社　昭四五・十一　笠井秋生「シンポジウム「羅生門」をめぐって」雑誌『解釈と鑑賞』至文堂　昭六一・七　一四八頁以下

(8) 竹内眞『芥川龍之介の研究』大同館書店　昭九・二　二三二頁

(9) 三好　前掲書　六四頁

(10) 清水　前掲論文　一〇頁

(11) 関口安義　前掲「シンポジウム」一五四頁

(12) 鳴嶋甫「「羅生門」の読みのいろいろを整理する」昭和六二年度日本国語教育学会発表資料

(13) 平岡　前掲書（第二節参照）一三二頁

(14) 清水　前掲「シンポジウム」一四二頁

(15) 三好　前掲書　六三頁

(16) 竹内　前掲・　二三一頁
(17) 吉田　前掲書（第二節参照）六四頁
(18) 時枝誠記『日本文法・口語編』岩波全書　昭五三・三　一九一～一九二頁
(19) 清水　前掲論文　三頁　石割透『芥川龍之介――初期作品の展開――』有精堂　昭六〇・二七八頁
(20) 時枝誠記『國語學原論』岩波書店　昭一六・一二　三八一頁
(21) ロラン・バルト「物語の構造分析序説」一九六六　花輪光訳『物語の構造分析』みすず書房　昭五四・十一　一八頁
(22) ツヴェタン・トドロフ「詩学」一九七三　松崎芳隆訳『構造主義』筑摩書房　昭五三・八　一三一頁
(23) 宇野浩二『芥川龍之介』文芸春秋新社　昭二八・五　三一四頁
(24) ウラジーミル・プロップ『昔話の形態学』一九六九　北岡誠司他訳　白馬書房　昭五八・一〇
(25) バルト　前掲論文　一七頁以下
(26) バルト　前掲論文　一六頁
(27) たとえば、勝倉壽一の「羅生門」――生の摂理」（『芥川龍之介の歴史小説』教育出版センター　昭五八・六）や平岡敏夫の「「羅生門」の異空間」（雑誌『日本の文学』第一集　有精堂　昭六二・四）に「象徴」の語が何度か使用されているのは、その一つの現れと言えよう。
(28) トドロフ　前掲論文　一三二頁　なおバルト自身も前掲論文のなかで「ある種の単位は混成的でありうる」（一二一頁）としている。
(29) 清水　前掲論文　六頁　平岡　前掲書　一三〇頁
(30) 清水　前掲論文　五頁
(31) 駒尺喜美（『芥川龍之介の世界』法大出版局　昭四七　十一　三〇頁）の「相対的な相関関係」という語は、本稿の視点と類似している。氏の論点は善悪の問題にあって、その点が本稿とは異なる。
(32) 重松泰雄　三嶋譲「テクスト評釈　羅生門」雑誌『國文学』學燈社　昭六〇・五、九〇頁に、老婆の論理は「下人がすでに門の下で到達していた結論である」とある。
(33) 平岡　前掲書　一三五頁
(34) こうした捉え方は、平岡（前掲書　一三五頁）の「羅生門から遠ざかりつつある下人を支配しているのは、やはり雨の夜の荒れ果てた京都である」という指摘や、勝倉（前掲書　三五頁）の「下人の未来が、やがてより強者の生の論理の前に犠牲となる」ことを「否定する根拠もない」とする指摘にも見られる。だが平岡の論は「荒れ果てた京都」の意味を深く追及することよりも別の問題（美）へと視点を移し、勝倉の論は「生の摂理」の「醜悪」さを読みとり、本稿とは異なった見解に至っている。
(35) 清水　前掲「シンポジウム」一四六頁
(36) 関口　前掲「シンポジウム」一六二頁　なお氏の用いている「空所」という語は、ヴォルフガング・イーザーの用語で、詳しくは『行為としての読書』（一九七六）轡田収訳　岩波現代選書　昭五七・三を参照のこと。とくに三一二頁以下。
(37) 首藤基澄（「羅生門」雑誌『日本文学』昭五八・六　七三頁）は、清水らと同じく下人の力に注目しつつ、末尾の一行が「改変されても、本質的には変わらない。」と言う。だが、作品の結びの一文の、しかも大幅な改変は、慎重にその意味が問われるべきではないか。
(38) 「仙人」と「羅生門」が言わば「連続」した関係にあったことは、清水康次「「羅生門」への過程」『國語國文』昭五七・九に詳しい。
(39) 吉田（前掲書七八頁）に「自己を把握すること弱く、他人の眼にうつる自分の姿に始終注意をひかれるばかりで、自己を絶対的に生かし得ない鼻長内供」という指摘がある。

（上越教育大学助手）